ブラウン・ロビン

1
王様が　取り巻きの貴族たちと
　酒を飲んでおりました
王様が　取り巻きの貴族たちと
　酒を飲んでおりました
一緒に席に着けるのは
　愛する一人娘だけでした

2
娘は緑の服を着て
　なみなみと酒をついで回りました
その眼は庭で雨に打たれる
　ブラウン・ロビンに釘付けでした

3
できる限りの速足で
　娘は部屋に戻りました
窓を開くと
　ハープを弾いてうたいました

4
「お庭に小鳥が一羽
　なんてきれいな声かしら
いつの日か
　愛するあなたにお会いしたい」

5
「君の言葉が
　嘘偽りのない真実ならば
美しい恋人よ
　今宵君の部屋で会えるでしょうか」

6
「お父様と陽気なギルバートが
　酒盛りを始めたら
きっとあなたを
　お部屋にお迎えいたしましょう」

7
娘は門番に酒を振舞いました
　とびきり強いビールとワイン
門番はすっかり酩酊
　酔った豚のようになりました
娘は門の鍵を手に入れて
　恋人を中へと引き入れました

8
夜が白々と明けてきて
　朝日が部屋にさしこむと
ブラウン・ロビンは慌てました

「すぐにも見つかるに違いない」

9

陽気な娘は言いました
「怖がることなどありません
うまく中に入れたのですから
うまく外にも出しましょう」

10

できる限りの速足で
娘は酒蔵へ行きました
上等なワインカップを手に取ると
だらりと下にさげました
ちょうどその時　蔵におりてきた
王様とばったり会いました

11

「おまえはどうしてこんなところで
ワインカップなど持っている
蔵のワインや酒樽を
飲み干すつもりではあるまいな」

12

「海を越えて贈られた
お父様のワインのせいで
頭はふらふら　まるで船酔い
部屋にはとてもいられません」

13

「外へお行き　かわいい娘
外の空気を吸うといい
緑の森を散歩しなさい
侍女も連れて行きなさい」

14

いじわるな門番が言いました
なんといまいましい門番でしょう
「侍女なら森へ行ってもいいけれど
高貴な姫が森へ行くなど言語道断」

15

「私には三十三人の
侍女がついているけれど
その中の誰一人
私が欲しい花を知らないわ」

16

できる限りの速足で
娘は部屋に戻りました

ブラウン・ロビンに服を着せ
　侍女のようにみせました

17

ブラウン・ロビンに
　緑の服を着せました
足には絹の靴下と
　なめしの靴をはかせました

18

弓は胸に
　矢は袖に
立派な剣は肌身に付けて隠しました
　すべては愛する人のため

19

できる限りの速足で
　娘が出ようとした時に
意地悪な門番が言いました
　なんといまいましい門番でしょう
「森へ行く侍女の数を数えよう
　戻った時に減っていないか確かめよう」

20

最初に外に出したのは
　ブラウン・ロビンその人でした
王様はぼそりと言いました
　「こりゃまた太った娘だわい」

21

娘は五月の朝に出て行きました
　良く晴れた朝でした
二度と戻ってきませんでした
　老いた父は一人ぼっちになりました

（鎌田明子訳）